

貯法：室温保存
有効期間：3年

承認番号	30100AMX00100
販売開始	2019年12月

血行促進・皮膚保湿剤

ヘパリン類似物質スプレー

ヘパリン類似物質外用泡状スプレー0.3%「日医工」

Heparinoid Foam Spray

2. 禁忌（次の患者には投与しないこと）

- 2.1 出血性血液疾患（血友病、血小板減少症、紫斑病等）の患者〔血液凝固抑制作用を有し、出血を助長するおそれがある〕
2.2 僅少な出血でも重大な結果を来すことが予想される患者〔血液凝固抑制作用を有し、出血を助長するおそれがある〕

3. 組成・性状

3.1 組成

販売名	ヘパリン類似物質外用泡状スプレー0.3%「日医工」
有効成分	1g中：ヘパリン類似物質 3.0mg
添加剤	カルボキシビニルポリマー、ヒプロメロース、ポリオキシエチレン（160）ポリオキシプロピレン（30）グリコール、1,3-ブチレングリコール、濃グリセリン、2,2',2''-ニトリロトリエタノール、パラオキシ安息香酸メチル、パラオキシ安息香酸プロピル

3.2 製剤の性状

販売名	ヘパリン類似物質外用泡状スプレー0.3%「日医工」
色・剤形	無色～微黄色の澄明なローション剤である。ポンプを押すとき、吐出液は泡状である。

4. 効能又は効果

血栓性静脈炎（痔核を含む）、血行障害に基づく疼痛と炎症性疾患（注射後の硬結並びに疼痛）、凍瘡、肥厚性瘢痕・ケロイドの治療と予防、進行性指掌角皮症、皮脂欠乏症、外傷（打撲、捻挫、挫傷）後の腫脹・血腫・腱鞘炎・筋肉痛・関節炎、筋性斜頸（乳児期）

6. 用法及び用量

通常、1日1～数回適量を患部に噴霧する。

9. 特定の背景を有する患者に関する注意

9.5 妊婦

妊婦又は妊娠している可能性のある女性には、治療上の有益性が危険性を上回ると判断される場合にのみ使用すること。

11. 副作用

次の副作用があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には使用を中止するなど適切な処置を行うこと。

11.2 その他の副作用

	0.1～5%未満	頻度不明
過敏症	皮膚炎、そう痒、発赤、発疹、潮紅等	皮膚刺激感
皮膚（投与部位）		紫斑

14. 適用上の注意

14.1 薬剤交付時の注意

使用後はきちんとキャップをしめ、保管すること。

14.2 薬剤使用時の注意

- 14.2.1 潰瘍、びらん面への直接噴霧を避けること。
14.2.2 点鼻用として鼻腔内に使用しないこと。
14.2.3 顔面、頭部等、吸入する可能性のある患部には注意して使用すること。

17. 臨床成績

17.1 有効性及び安全性に関する試験

17.1.1 国内一般臨床試験

皮脂欠乏症患者54例、進行性指掌角皮症患者27例を対象にヘパリン類似物質ローション0.3%の適量を1日2～3回、皮脂欠乏症は2週間、進行性指掌角皮症は4週間単純塗擦した一般臨床試験¹⁾における改善率は、次のとおりであった。
副作用は認められなかった。

表 対象疾患別の改善率

対象疾患名	改善率（%）（改善以上）
皮脂欠乏症	98.1（53/54）
進行性指掌角皮症	85.2（23/27）

17.1.2 国内一般臨床試験

肥厚性瘢痕・ケロイド患者20例を対象にヘパリン類似物質ローション0.3%の適量を1日1～数回、8週間単純塗擦又はガーゼ等へのばして貼付した一般臨床試験²⁾における改善率（改善以上）は、66.7%（10/15例）であった。
副作用は認められなかった。

17.1.3 国内一般臨床試験

外傷（捻挫、挫傷）患者20例を対象にヘパリン類似物質ローション0.3%の適量を1日数回、10日間塗擦した一般臨床試験³⁾における改善率（改善以上）は、100%（18/18例）であった。
副作用は認められなかった。

17.1.4 国内一般臨床試験

皮脂欠乏症患者男女60例を対象に、ヘパリン類似物質ソフト軟膏0.3%を1日2～3回、2週間塗布した後、ヘパリン類似物質フォーム0.3%を1日2～3回、2週間塗布した一般臨床試験⁴⁾において、薬剤切り替え後も治療効果は維持されることが確認された。1回あたりの塗布量はfingertip unit（FTU）に基づき算出した。
副作用は1例2件認められ、その内訳は、そう痒症及び紅斑が各1.7%（1/60例）であった。

17.3 その他

17.3.1 皮膚刺激性

健康成人男女30例を対象に、ヘパリン類似物質フォーム0.3%の皮膚安全性の確認を目的に48時間密封パッチテスト及び光パッチテストを実施した。その結果、皮膚刺激性に忍容性があることが確認された⁵⁾。

18. 薬効薬理

18.1 作用機序

作用機序は明確ではない。

18.2 血液凝固抑制作用

血液凝固時間を延長し、血液凝固抑制作用を示す（ヒト⁶⁾、イヌ⁶⁾、ウサギ⁷⁾）。

18.3 血流量増加作用

水素クリアランス法による実験で、皮膚組織血流量の増加を認めた⁸⁾、⁹⁾（ウサギ）。

18.4 血腫消退促進作用

実験的血腫の消退促進を認めた⁸⁾（ウサギ）。

18.5 角質水分保持増強作用

皮膚に対する保湿効果を有し（ヒト）¹⁰⁾、実験的乾燥性皮膚において角質水分保持増強作用を認めた⁹⁾、¹¹⁾（モルモット）。

18.6 線維芽細胞増殖抑制作用

組織癒着防止に関する実験で、線維芽細胞増殖の抑制を認めた⁶⁾、¹²⁾（ウサギ）。

18.7 抗炎症作用

紫外線紅斑抑制作用を有する¹³⁾（モルモット）。

19. 有効成分に関する理化学的知見

一般的名称：ヘパリン類似物質（Heparinoid）

性状：帯黄白色の無晶性の粉末で、においはなく、味はわずかに苦い。水に溶けやすく、メタノール、エタノール（95）、アセトン又は1-ブタノールにほとんど溶けない。

22. 包装

100g（ポリ容器）×10本

23. 主要文献

- 1) 原田昭太郎 他：臨床医薬. 2001；17（7）：1051-1062
- 2) 大島良夫 他：臨床医薬. 2001；17（7）：1079-1087
- 3) 山崎誠 他：臨床医薬. 2001；17（7）：1071-1078
- 4) 川島眞 他：皮膚の科学. 2017；16（5）：356-365
- 5) 川島眞 他：皮膚の科学. 2017；16（5）：366-371
- 6) 中安国裕：東京慈恵会医科大学雑誌. 1961；76（2）：494-514
- 7) 石川浩一 他：外科. 1955；17（12）：849-854

- 8) 木戸裕子 他：基礎と臨床. 1996；30（3）：463-469
9) 土肥孝彰 他：薬理と治療. 2001；29（2）：127-134
10) 安藤隆夫 他：日本化粧品科学会誌. 1984；8（3）：246-250
11) 難波和彦：久留米医学会雑誌. 1988；51（6）：407-415
12) 間狩孝：日本外科宝函. 1959；28（9）：3757-3776
13) Raake W.：Arzneim.-Forsch./Drug Res. 1984；34（4）：449-451

24. 文献請求先及び問い合わせ先

持田製薬株式会社 くすり相談窓口
東京都新宿区四谷1丁目7番地 〒160-8515
TEL 03-5229-3906 0120-189-522
FAX 03-5229-3955

26. 製造販売業者等

* 26.1 製造販売元



26.2 発売元



26.3 販売

